

【 1 】

氏 名	西 川 和 夫 にし かわ かず お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	文 博 第 15 号
学位授与の日付	昭 和 47 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 心 理 学 専 攻
学位論文題目	知能発達の縦断的研究 —構造と発達連関の分析—

(主 査)
論文調査委員 教授 園 原 太 郎 教授 野 田 又 夫 教授 池 田 義 祐

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、小学1年から中学3年まで9年間、1年毎に反復測定された228名のビネ知能検査の狩野広之氏の資料を再整理し、これに著者の考案したクラスター分析を実施し、各学年における知能の構造および学年間にわたる知能の発達の連関を明らかにしようとした研究である。

このような分析には屢々因子分析法が試みられるが、著者は因子分析法のもつ手法的難点と因子の解釈の困難性とを顧慮し、手法的には単純煩瑣であるけれども、資料のもつ直接的な情報をそのまま保持することの多いクラスター分析法を選んだ。これは因子分析法のもつ因子構造の不変性の前提が、発達の観点からは適当でないという著者の考えにもよっている。

発達過程の分析には、発達の变化に内在している発生的連続性を推論し、これを知識として体系化することが必要であり、この発達の関連について事実的根拠をうるためには発達の各時期の知的能力は独自の構造をもち、異なる時期の能力間に発生的な順序の一次元性が確かめられ、しかも、高い共変動が認められる必要がある。このことを確かめる方法として、各学年の測定項目間の相関を、平均としては最大で分散が最小となるようないくつかのクラスターに配列すること（直接クラスター分析）、テスト項目のすべての対についてその発生的順序の一義性を吟味する発生順序系列分析、異なった時期のクラスター得点間の相関をもととして、これらを更にクラスターに分ける縦断的クラスター分析が提案され、前記の資料についてこれらの方法が適用された。

ビネ知能検査の項目はよく吟味されているので、困難度の近似した項目間には若干の変動はあるにしても全体としてよく発生順序の一次元性が確認された。このことはこれらのテストを用いてなされるクラスター分析にも発達の基盤を保証するものと考えられた。直接クラスター分析によって、各学年夫々3～4のクラスターが分けられ、その構造の類似性と異質性とをもとに小学1年から中学3年までの間に大きく三つの発達段階を区分することができた。

縦断的クラスター分析は本研究の最も独創的な試みであるが、時相間クラスターとして10個余り区分さ

れ、夫々が支配する発達の潜勢力が解釈された、機能的な関連は第6学年までの発達に多くみられ、それ以後の分化では高い発達関連は認められなかった。これら支配する代表的な発達潜勢力をもとに三つの発達段階が区別され、それぞれの機能的意義について考察された。

これらの分析の結果を総合して著者は (1)知能の発達は単純な加算的合成ではなく、相対的に区別可能な比較的一般的な発達潜勢力に支配された全体的な変化の過程であること (2)各学年の知能は夫々独特の構造を形成すること (3)小学1年から中学3年までの間に三つの発達段階と二つの下位段階が区別され (4)各発達段階の特徴は、夫々の発達段階に属する各学年の中心能力を支配する発達潜勢力に支配される等の考察をしている。

論文審査の結果の要旨

本研究は他者の資料をかりたのではあるが、項目間相関の算出、これに基づくクラスター分析など、独自の再整理を試みて、困難な知能の発達の関係について貴重な分析結果を提示した。クラスター分析法は煩瑣ではあるが、原資料のもつ情報を十分に利用する点では有利であることが本研究においても示された。ただここに用いられたクラスター分析は視察を主とし、従っていわば試行錯誤的な反復を重ねるものであり、これによる構造論や発達関連論は理論としての弱みを蔵する。この理論化には尚多大の精進が必要であろう。しかし殊に発達の連関を縦断的クラスター分析で整理し、知能の構造の発達関係について多くの新知見をもたらしたことは、重要な寄与というべきである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。